

聖書解釈の方法の成立

—アウグスティヌス初期の「創世記」註解をめぐる*—

上 村 直 樹

序

アウグスティヌス初期の聖書註解『未完の創世記逐語註解』（以下『未完註解』と略記）が呈示する「創世記」解釈は、くりかえし著された「創世記」冒頭数章に関する註解書、とりわけ『創世記逐語註解』（以下『逐語註解』と略記）における「創世記」解釈に比すれば、その方法上の原理においてもその実践においても未熟な所産であると見なされてきた¹⁾。さらにそのような評価がアウグスティヌス自らの証言に一致する、あるいは由来することも夙に知られるところである。実際、晩年において自己の思索の軌跡を綿密に検証し加除更訂をなした『再考録』のうちに見出されるのは、この『未完註解』が「創世記」1:26にいたって中断し未完のままに公刊されることになったという経緯の報告である。『未完註解』は「創世記」1:26 解釈のアポリアに逢着するもそれを剔抉しえなかったと評されてきたのである。

本論文においては、『未完註解』が呈示する解釈の意義を「創世記」1:26 解釈を切り口にして考察することに取りくむ²⁾。まず着眼すべきは『未完註解』が未完の書物として公刊されるにいたった経緯である。そこで、1:この註解の企てが断絶した所以を想定するために、『未完註解』における「創世記」1:26 解釈の実際を審らかにする。ついで、2:想定された断絶の所以を検証することによって、『未完註解』における「創世記」解釈のアポリアが途絶した箇所「創世記」1:26 ではなく、つづく「創世記」1:27 に由来することを明らかにする。さらに、3:この註解書においてすでに、『逐語註解』という「創

世記」解釈の結実を先取りする仕方では聖書解釈の方法が適用されていたことを証示する。こうした手順を踏むことによって『未完註解』の限界を設定するとともに、解釈法においては先駆的な実践であるというその意義を呈示したいと考える。

1 註解断絶の所以

1.1 アウグスティヌスの証言

まずは『再考録』におけるアウグスティヌスの証言を確認してみたい。

アウグスティヌスはすでに『マニ教徒に対する創世記註解』（以下『対マニ教徒註解』と略記）において「比喩的な意味にそくして聖書のことばを取りあつかった」ことを振りかえるとともに、それに比すれば「きわめて厄介で困難きわまる仕事」に『未完註解』において着手したと述べる（1.18）。その試みについてアウグスティヌスは明言する。

自然的な事物のそれほどに隠された事柄を字義にそくして、つまりそこで語られていることをいかに歴史にそくして理解できるかを説明する³⁾。

このようにアウグスティヌスは、先行する『対マニ教徒註解』とは異なる解釈法にもとづいて「創世記」における創造という出来事を説明しようと目論んでいた。そして、註解の初心者ゆえにその仕事を中断したこと、『再考録』をまとめるときにその成果を点検し一定の価値をみとめて公刊することにしたという経緯も報告している。さらに註解中断の箇所が『未完註解』16.60であると指示したうえで、「創世記」1：26が「ふたたび考えられるべき、また吟味されるべき」一節であるけれども、補訂し加筆した解釈（16.61-62）もこの註解を結了させたと言うにはふさわしくないと註している。というのも、「すくなくとも第六日にかかわるすべてのわざと神のことばについて論じられたはずである⁴⁾」と回顧し元来のプランを示しているからである。『未完註解』着手にあたっては「創世記」第1章全体の解釈が企図されていた。

これら一連の証言からアウグスティヌスが聖書解釈の方法を自覚的に選択してこの註解に取りくんだこと、また『未完註解』が「創世記」1:26 解釈にいたって途絶したことが明白である。それではなぜ解釈は中断しそのままにおわったのか。註解未完の所以を想定するため、その断絶した箇所に着目するまでに「創世記」解釈の破綻が見出されるか否かを検証してみよう。

1.2 解釈破綻の検証

さて、アウグスティヌスは「創世記」をそのはじめから順番に註解したのちに第六日の創造に関する解釈に取りくむ (15.53)。そして、「創世記」1:26「神は言われた。『我々の似像に向けて、我々の類似性に向けて、人を作ろう』』という一節について綿密に考察する (16.55-60)。その取りくみのうちに破綻は認められるだろうか。

まず、アウグスティヌスは「我々は作ろう」ということばに着目する (16.56)。なぜ「我々」という複数形が用いられるのか。その疑問を解明するためにアウグスティヌスは「似像 (imago) と類似性 (similitudo)」という二つのことばの関係を明らかにしようところみる (16.57)。すべての似像はその原像に似ている (similis) けれども、似ているものすべてがそのものの似像ではない。一方、あるものがそれとは別のものの似像であるならばあるものはその別のものに似ていて、かつその別のものに由来しなければならない。それでは、似像がかならず似ているにもかかわらず「似像と類似性」とかさねて語られたのはなぜなのか。そこでアウグスティヌスは、何か似ているもの (simile) と似ていること、類似性とは別々の事態を言表しているのではないかと考える。つまり、似ているものは類似性によって似ている。また、似像は似ているものであっても類似性ではない。

それゆえ、それによってすべてのものが作られた神の類似性は本来的に (proprie) 類似性と言われるのである。なぜなら、それはある類似性にあずかることによって似ているのではなく、それ自身が第一の類似性

(prima similitudo) だからである。神がその類似性によって作ったものは何であれ、この第一の類似性にあずかることによって似ているのである⁵⁾。

こうした考察をへて、似像が父から由来し生まれたこと、一方、類似性とはその似像がただ似ているのみならず似ているものすべてがあずかる似ていることそれ自体を指示することが諒解される (16.58)。すべてのものはこの類似性によって作られたのであり、この類似性がすべてのものに対してそのかたち (species) を授ける。それゆえ、すべてのもののうちに互いに一致する痕跡が見出される (16.59)。

ついでアウグスティヌスは、解釈の端緒 (16.55) においてすでに指摘した人間と他の生き物との「共通点と差異」(coniunctio et discretio) という枠組みのもとで神の類似性と被造物との、とりわけ理性的な魂との関係性について問うている (16.59-60)。というのも、「創世記」1:25-26 においては、同じ日に地の獣と人間が作られたにもかかわらず人間の創造については他の生き物から隔てて語られているからである (16.55)。アウグスティヌスはそうした記述の所以を解明するために、人間が神の類似性に「向けて (ad)」作られたというテキストに着眼する。すべてのものは互いに類似した部分から構成されている。類似性に「よって (per)」作られたからである。だが一方、理性的な魂のみが類似性に「向けて」作られた。

したがって、理性的な存在は神の類似性によって作られたのでもあり、その類似性へ向けても作られた。いかなるものもその間にはないからである⁶⁾。

アウグスティヌスは人間の精神が神の類似性に「向けて」作られたゆえに、「もっとも純粹で幸福であるときには」(16.60)、その類似性という真理を見ることが可能であると考え。換言すれば、理性的な存在の他のものに対する卓越性が、神の類似性とのこのような直接的な関係性をあらわす「向けて」とい

うことばによって言表されていると解釈する⁷⁾。さらに父と子の関係性が明らかにされる。子は父の「類似性」であると言われるとき、そこにはいかなる不類似も認められない。一方、父が類似性をもっているからには父は単独ではない(16.60)。

『未完註解』の解釈はこの箇所では中断する。一連の解釈を読むかぎりそこに何らかの躊躇や逡巡を読みとることはできない。アウグスティヌスは「似像に向けて、類似性に向けて」という章句に焦点をしばりその関係を規定する。また、人間の被造性を神の類似性、つまり神の言葉である子へ「あずかる」ことにおいて認め、理性的存在の卓越性を明示している。それではなぜ『未完註解』は断絶したのだろうか⁸⁾。

1.3 仮設される二つの可能性

『未完註解』の解釈が断絶した所以として二つの可能性を挙げることができよう。その第一はその時点で取りくんでいた「創世記」1:26 解釈に関わり、その第二はそれにつづく「創世記」1:27 解釈に関わる。

『再考録』によれば、「ふたたび考えられるべき、また吟味されるべき」一節とは「創世記」1:26 であった。実際、アウグスティヌスは註解公刊に先立ってその一節をふたたび取りあげる。そして、人間がそれへと「向けて」作られた類似性が神の子のそれであるという理解を修正し、人間は神の似像であるとともに三位一体の神へと「向けて」作られたという解釈を呈示している。このような修正にいたりえなかったことがまず註解断絶の所以として想定されるだろう。

さらに『再考録』では、「創世記」1:26 解釈を加筆したのちに公刊したこの註解書について、それが「神的な書物を説明し探求する私の最初の企てを証言する」(1.18) と述べている。加筆した解釈について、それが修正であろうとも当時の自らの企てを逸脱することはないと評するのである。そして、その試みが「創世記」1:27 前半まで到達しているからには、つづく一節「神のかたちに作り、男と女に作った」を理解することの困難さもまた註解断絶の所以

として想定されるだろう。

2 註解におけるアポリア

これら二つの可能性の何れがアウグスティヌスの直面した困難なのか。この問いを考えるためにまず、『未完註解』公刊にあたって更訂した「創世記」1：26 解釈を検証する。つぎに、「創世記」1：27 については『未完註解』において註解されていないので先行する『対マニ教徒註解』の解釈を検証する。

2.1 「創世記」1：26 の修正解釈

「創世記」1：26 の解釈を更訂するにあたってまず、以前の解釈がまとめられている。

「神は言われた。『我々の似像に向けて、我々の類似性に向けて、人を作ろう』」。これまでに述べられたことは、神が語った「我々の似像に向けて、我々の類似性に向けて、人を作ろう」というこの聖書の言葉を、人間がそれへ向けて作られた神の類似性とは神の言葉そのもの、つまり独子である子であると理解するという解釈にそくして説明することであった⁹⁾。

ついでアウグスティヌスはその解釈への修正に着手する。はじめに「コリント前書」11：7「男は、神のすがたであり栄光 (imago et gloria Dei) であるから、かしらに物をかぶるべきではない」を引いて、人間も神の似像であること、しかしその似像に等しくないことを認める。そして、すでに言及した疑問 (16.56)、なぜ「我々は作ろう」と複数形で語られたかについて、それは人間が父の似像に向けてのみならず、また聖霊の似像に向けてのみならず、三位一体たる神の似像に向けて作られたからだと指摘する。一方、「創世記」1：27「神は神の似像に向けて人を作った」と単数形で語られたのは、三位一体たる神の唯一性を示すためだと解している (16.61)。

こうした論旨のうちに、人間が神の類似性に向けて作られたという理解から、

人間が神の似像であるけれどもその似像には等しくないという理解への修正が見出される。すでに確証されていたのは、神の類似性とは神の子であるということであった。そして、似像と類似性という関係性については似像が似ていることは類似性によってであり、ゆえに「類似性に向けて」という関係が特権的であることが示されていた。人間は神の類似性に向けてあり、すなわち、神の子に対して類似性という関係を有することが首肯されていたのである（16.57）。しかし、人間が神の似像に向けて作られたという章句は十分に説明されなかった。いかにその理解が示されるだろうか。

注視すべきは人間が神の似像であると述べる「コリント前書」の一節である。アウグスティヌスは、人間が神の似像であるけれどもそれとは「等しい (aequalis)」わけではないという理解を提出することによって、人間が神の似像に向けて作られたことを証示しようとする。 「等しさ」という関係性を新たに導入するのである。仮に二つのものが等しいならば、それらは必然的に似ている。ただしその逆は成立しない。また、その二つのものが等しいとはそれらの任意の特徴が一致するときである。たとえば、二つの卵の形が同じである、あるいは親子の身体的な特徴が同じであるなどである。ところで、等しさと似像であることのあいだには論理的な関係は認められない。二つのものが等しいときに一方が他方の似像である必要はないからである（二つの卵のケース）。また、それら等しい二つのものに関して、似像が原像と等しい類似性を有さずとも似像と原像であることもあるだろう（父と父との一定の類似性をもつ子のケース）。さらに、それら二つが似像とその原像であり等しいということもあるだろう¹⁰⁾。

アウグスティヌスは、この「等しさ」という関係性を神の子と人間のケースに適用する。そして、子は父の似像でありそれと等しく当然ながら父の類似性でもある一方で、人間は神の似像であり、ゆえに類似性であるが、それとは等しくないという理解が成立するのである。

2.2 「創世記」1:27の先行解釈

アウグスティヌスは『対マニ教徒註解』において、「創世記」1:27「神は彼らを祝福して言われた。『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ』』という神の祝福のこぼれを取りあげたのちに、「男と女に作った」という章句の霊的な理解を提出する。

というのも、神の祝福は、罪の後の肉적인豊穡さへ向けられたと信ずるようによまた靈的に (spiritualiter) 理解することが我々にとって妥当である。実際、それ以前には男と女の清い結合 (casta coniunctio) があった¹¹⁾。

このような理解は、「創世記」2:18「また主なる神は言われた。『人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を作ろう』』に関する註解と一貫して捉えられる。そこでもまた、「男と女」とは非物体的な魂の理性的なはたらきと非理性的なはたらきを意味するという解釈が呈示されているからである (2.12.16)。そして、肉적인結合によって「この世の子供」が生まれるのは原罪ののちであるゆえに、「男と女に作った」という章句によっては身体 formation が意味されないことになる。

こうした解釈によって「創世記」1:27、また人間の創造に関する次のような理解が成立する。作られたものが身体ではなく精神の觀想的なはたらきと実践的なはたらきであるならば、「創世記」1:26において、人間はその非物体的な魂、あるいは精神において神の似像と類似性に向けて作られたのであり、人間の身体が作られたのは「創世記」2:7「主なる神は、土のちりでひとを作る」と語られているときである。

2.3 解釈成立への道筋

これら「創世記」の二つの章句解釈に内包される困難はいかに剔抉されうるだろうか。これまでの検証を踏まえたくて解釈成立への道筋を探ってみたい。

まず「創世記」1:26 解釈について明らかなのは、人間が神の子の類似性へ

と「向けて」作られたという理解から、神の似像であるけれどもそれと「等しい」わけではないという理解へ移行していることである。そして、そうした更訂は人間が神の似像であると述べる「コリント前書」11:7によって促されるとともに、三一論における父と子の関係性を明らかにすることによって成立する¹²⁾。それではアウグスティヌスは、そのような更訂の必要性をいつ頃弁えたのか。それはすでに『未完註解』に着手していた時期だと思われる。というのも、その直前にカトリックの信仰と信条の要諦をまとめた『信仰と信条について』において、三一性の弁別と相関性について説明するとともに父と子の関係を規定する困難さを指摘して、その解明への試みを枚挙していたからである¹³⁾。もっともその解決が示されてはいない。

そうであるならば『未完註解』の修正解釈はいつ頃成立したのか。これは『未完註解』が中断した時期に近接すると思われる(395-396年)。というのも、すでに言及したように、父と子の関係を規定するに際しては「等しさ」という指標が組みこまれなければならない。そして、『83諸問題集』第74問のうちにそうした論述を見出すのである¹⁴⁾。「コロサイ書」1:14-15への註解と題された第74問は「ピリピ書」2:6-7「キリストは神のかたちであったが、…人のすがたになった」を解釈する第73問と一貫して、キリストの父との同等性を論ずる¹⁵⁾。そして、似像・類似性・等しさの論理的な連関を分析することによって、神の子が神の似像であり類似性であり、それと等しいと規定するのである。

帰結するのは、子が神から生まれたゆえに神の似像であり、似像であるゆえに類似性であるということのみならず、子はまったく神に等しく時間的な間隔によってへだてられてもいないということである¹⁶⁾。

一方、「創世記」1:27 解釈については「神のかたちに作り、男と女に作った」という一節を『対マニ教徒註解』とは異なる仕方でも解釈することが求められる¹⁷⁾。そうであるならば、「男と女」という区別は身体に従って生ずるので

身体が形成されたと解することになる。そして、「創世記」2:7「主なる神は、土のちりでひとを作る」という章句をいかに解するかという問いが生じてくる¹⁸⁾。さらには、靈的な解釈法によって回避されていた問題性、つまり「創世記」2:4からふたたび始まるとも見なされる創造の物語をいかに「創世記」第1章の創造の六日間の記事と両立して解釈するか、というアポリアが呈示される。この課題にアウグスティヌスは『逐語註解』執筆にいたるまで取りくんでいない。その困難さが持続していたと推測される。

このように「創世記」1:26に関する理解がはやい段階で得られる一方、「創世記」1:27に関わる包括的な理解は『逐語註解』にいたるまで示されていない。そこで、『未完註解』断絶の所以は後者にかかわる問題性であったと考えることができる。それゆえに註解書は断絶したままになったのではないか。ついで、こうした中断にいたるアウグスティヌスの解釈法がいかに成立してゆくかを検証してみたい。

3 聖書解釈法と聖書テキストの様相

3.1 聖書解釈法の展開

『未完註解』においてアウグスティヌスは、自覚的に聖書解釈の方法を選択したと考えられる。というのも、その「歴史にそくして理解できるように説明する」方法とは‘ad litteram’であると『未完註解』公刊にあたって明示しているからである。そこで、著作のタイトルにあらわれる‘ad litteram’についての説明をその註解書のうちに探してみるならば、実のところそのことばへの言及はまったく『未完註解』のうちに見出されない。加えてこの註解書に前後する著作では、‘ad litteram’という解釈法についてむしろ否定的な評価をくだすのがつねである¹⁹⁾。それではなぜ、著作公刊にあたってこの註解書がそうした解釈法にそくしていると宣言したのか。

ここで想定されるのは‘ad litteram’という方法の内実が変化したのだろうかということである。『未完註解』に着手した段階において、‘ad litteram’とは「文字の音が響くのととは違ったようには理解しない」²⁰⁾ことであり、「文字どお

りに (ad litteram), つまりことばどおりに (ad verbum) に受けとるよりも危険なこと」²¹⁾ はない。それゆえ、この方法はテキストに隠されている意味を霊的に開示する解釈法に対峙して、むしろ斥けられるべきであると見なされた²²⁾。一方、‘ad litteram’ という方法を採る『逐語註解』においては、それが ‘figurate/spiritualiter’ な方法と対比される解釈法であるという理解はいぜんとして持続するにせよ、語られた事柄をそれぞれに固有の事実の表明と受けとる ‘ad litteram/proprie’ な方法が聖書を註解するに際して適用されるべきであるという見解もくりかえし表明される²³⁾。

いかにこの変化は説明されるか。それはすでに推定したように、‘ad litteram’ の指示する内実が変化したことによってである。『未完註解』に着手した段階における ‘ad litteram’ とは音声がかみとりに理解することであった。もちろんそれは単なる音声ではなく、分節化され文字化されうる音声を指示する。だがそれは、あくまでも語のレベルのことである。その事例として、実際には存在しないものではなく現実の世界のなかの人や物のような個物を名指しする語を挙げるにせよ、それが人間的音声として言語の一部であるとしても思考活動について何かを明らかにすることはない。というのも、それは言語の構成要素として単体であって、日常の言語活動を支えつつもそれ自体としては現実に機能しないからである²⁴⁾。一方、『未完註解』に加筆したときに、また『逐語註解』では ‘ad litteram’ の対象について、それが「自然的な事物のそれほどに隠された事柄」²⁵⁾ であり、「起こったと語られていること全体をまず、その本来性の表明と受けとるように」²⁶⁾ とすすめている。明らかにその対象は語ではなく、聖書において記述されている出来事を指示する文である。そして、そうした ‘ad litteram’ という方法によってはじめて何らかの思考活動の筋道をたどることが可能となる。それゆえに解釈法として受容されたのではなかろうか。

3.2 『未完註解』の解釈法

『未完註解』における解釈法とは何であったか。著作タイトルの ‘ad litteram’ とは『未完註解』着手のころに批判されていた「ことばどおりに」理解す

る方法なのか。それとも『逐語註解』において採られることになる方法を指示するのか。

さて、『未完註解』冒頭においては解釈法について次のように説明されている。

或る聖書註解者たちによって、聖書を解釈する四つの方法が伝えられている。……歴史 (historia) にそくして、比喩 (allegoria) にそくして、類比 (analogia) にそくして、原因 (aetiologia) にそくしてである。歴史とは神的であれ人間的であれ為された事柄が語られているときに存在し、比喩とは象徴的に語られた事柄が理解されるときに存在し、類比とは旧約と新約の一致が証示されるときに存在し、語られたまた為されたことの原因が伝えられるときに原因が存在するのである²⁷⁾。

この解釈法の四分類は同じ時期の『信ずることの効用について』のなかでも言及される。だが、この他のアウグスティヌスの著作のうちにはまったく認められない²⁸⁾。

これらの分類のなかの第一の方法に着目してみたい。この「歴史にそくして」という解釈法はその対象を「為された事柄 (res gesta)」であると指示することで、語のレベルではなく出来事を指示する文についての解釈法と見なしうるからである。そうであるならば『逐語註解』におけるアウグスティヌスの証言に一致しつつ、この第一の方法が 'ad litteram' と考えられる。すでに『未完註解』に取りくんでいるこの時期に 'ad litteram' の内実が変容しているのである。

さらに着眼されるべきはアウグスティヌスの論述の指向性である。というのも、「歴史にそくして」という方法があると語るならば、ついでその方法についての説明がつづくと期待されよう。しかし、その代わりにアウグスティヌスは「歴史」それ自体を定義する。換言すれば、歴史的な記述の様相について説明するのである。この記述の転位から攫まれるべきは一方から他方への移行が

たやすいということである。一方とは、テキスト内部にはさまざまに異なる様相の記述が含まれているという考えであり、他方とは、テキストを解釈するさまざまな方法があるという考えである。このような推移は、アウグスティヌスにおいてテキストを弁別することとそうしたテキストに合致する解釈法を適用するという二つの解釈の営為を混同、あるいは同化する傾向があることを示唆すると見なされよう。それではそうした同一視はいかなる帰結をもたらすだろうか。

3.3 聖書テキストの様相

アウグスティヌスは『対マニ教徒註解』において解釈法についての二重の枠組みを提出している。というのも、「創世記」を「文字どおりに」理解することができない場合には比喩的な仕方でも解釈しなければならないと述べる一方で、二つの方法、「歴史にそくして」と「預言にそくして」を並列して呈示するからである。

歴史にそくしては為されたことが物語られ、預言にそくしては来るべきことが預言される²⁹⁾。

聖書テキストには文字どおりの意味と比喩的な意味が内包されている。そこで「歴史」とは、時間的空間的に為されたことに関わるだけでなく、内包する意味を媒介にしつつも比喩的な解釈を認める枠組みであると設定されよう。「預言」についても事態は同じである。したがって、『対マニ教徒註解』では、「創世記」を歴史にそくして比喩的に解釈するとともに預言にそくして比喩的に解釈する、つまり、テキストを歴史としても預言としても等しく解釈することが許容されているのである。

『逐語註解』においてはこれとは異なる考えが示されている。

たしかに「創世記」における叙述は、「雅歌」におけるような象徴的なも

のに関する類いの語りではなく、「列王記」やそのような種類の書物におけるような出来事に関する類いの語りである。しかし、「列王記」などでは人間の生活のもっともよく知られた慣習であるようなことが語られているので、困難なくむしろ明白にまずは文字通りに (ad litteram) 理解され、ついで起こった出来事が未来の何かを指示しているかが探られる。だが、「創世記」では慣れ親しんだ自然の経過を注視することによって生じないことが語られている³⁰⁾。

聖書テキストのうちには二つの類いの語り (genus locutionis) がある。たとえば「創世記」について、そこに尋常ではない記述が見出されるとしても、それはあくまでも出来事についての語りである。つまり、聖書テキストは一義的に規定される叙述である。歴史と預言の区別が問題ではない。というのも、それらが類義であると見なされるときにはそうした区別は解消されるからである³¹⁾。出来事に関する語りであっても預言にそくしての解釈が排除されないのは、それらを包摂する書物として「創世記」が捉えられるからではないか。ともあれこの一義的な規定のもとでは、'ad litteram' という方法が勝義に実践されることになる。

『未完註解』における聖書テキストの様相理解と方法理解の混同から示されるのは、アウグスティヌスがそれらを把握するにあたってははまだその途上にあつたという事態である。その混同のゆえに一義的に「創世記」を規定するにいたりえなかった。アウグスティヌスは実際、この四分類の解釈法それぞれを「創世記」最初の章句に適用することを試みている (3.6-10)。とはいえ、この註解書のなかで実践されるのはそのなかの「歴史にそくして」の方法にとどまっている。そうした限定によってすでに出来事を指示する文を対象とする 'ad litteram' という方法にしたがっているのである。とはいえ、その解釈法が他の解釈法といかに関わるのか、解釈法自体への反省はいまだ充分になされていない。それもまたその混同からの帰結であると見なされよう³²⁾。

結 語

アウグスティヌスは『未完註解』において、「創世記」1:27「神のかたちにより、男と女に作った」という章句がいかに「創世記」第2章と整合的に解釈しがたいのか、その問題性を予見することによってその註解を途絶させる。すでに語のレベルを対象とするいわば還元的な解釈ではなく、出来事を指示する文を基本単位とする‘ad litteram’な解釈法にそくして「創世記」解釈を実践していたからである。またその解釈法のもとでは、文が使用されている脈絡が問われ「創世記」テキストのアポリアが開示されるからである。それは世界の創造と時間についての形而上学的な思考によって開鑿されるべき出来事である。とはいえ、実践されはじめた解釈法はそうした思考の成熟とともにその有効性を確認されるだろう。この註解書が「未完の」と形容されるのはその意味においてであり、一方解釈法においては先駆的な実践であると捉えることができるのである。

注

*) 本論文は、中世哲学会第55回大会(2006年11月10日)における研究発表稿に加筆し一部を修正したものである。当日の発表に対するまたそれにつづく応答のなかでの、加藤信朗、清水哲郎、中川純男、水落健治、樋笠勝士各氏の質問と批評に感謝します。

1) たとえば、Teske 1991, 36-39; Marin 1992, 118-119; 片柳 1994, 228-230; Hill 2002, 110-111; Monat et al. 2004, 387-392 は一致して、『未完註解』が『逐語註解』にいたるまでの途上の註解であると指摘している。アウグスティヌスの一連の「創世記」註解の概要については、Agaësse and Solignac 1972a, 11-18; Vannier 1991, 83-94 を参照されたい。

2) 同じく「創世記」1:26 に着目する論考 Neil 2006 は、アウグスティヌスが実践した「創世記」1:26 解釈の総体を捉えようところみる。また、Teske 1990 は、アウグスティヌスの三一論的な思考の未熟さによって『未完註解』の限界を設定しようところみる。一方本論文では、「創世記」1:26 解釈を契機にして明らかにされる聖書テキストの様相理解についても吟味してみたい。

3) 『再考録』1.18: Mutzenbecher 1984, 54.

4) 『再考録』1.18: Mutzenbecher 1984, 54.

- 5) 『未完註解』 16.57: Monat et al. 2004, 494.
- 6) 『未完註解』 16.60: Monat et al. 2004, 500.
- 7) 神の類似性に関するアウグスティヌスのこうした解釈の背景である新プラトン主義的な定式については、Du Roy 1966, 358-359; Monat et al. 2004, 520-521 を参照。また、『未完註解』執筆時のアウグスティヌスがこの世における至福直観の可能性を認めていたことに関しては、Van Fleteren 1978 を参照されたい。
- 8) 『未完註解』(393年)と前後する時期の著作群における「創世記」1:26 解釈を検証しても、この箇所での断絶の所以を攫むための手がかりは見出されない。というのも、『真の宗教について』43.81 (390/391年)、『83 諸問題集』51.4 (391-395年)、『キリスト教の教え』1.22.20 (395/396年)におけるその章句の解釈も『未完註解』と一致する理解を示しているからである。
- 9) 『未完註解』16.61: Monat et al. 2004, 502.
- 10) 似像と類似性のこうした論理的な連関の分析については、Markus 1964 を参照。
- 11) 『対マニ教徒註解』1.19.30: Monat et al. 2004, 226.
- 12) このような更訂はさらに、「コリント前書」解釈を一つの契機として、アウグスティヌスの三一論理解においてキリスト論的な図式がいかに斥けられうるかを検証するという課題を呈示するように思われる: Bochet 2004, 316-327.
- 13) 『信仰と信条について』8.18: Rivière et al. 1988, 52.
- 14) いわゆるパウロ書簡「コリント前書」「コロサイ書」「ピリピ書」註解がこうした理解の成立をもたらしたという経緯は、『83 諸問題集』第 66-75 問が証示するようなこの時期の集中的なパウロ書簡繙読によって説明される。この時期のパウロ書簡繙読の実際を検証するという課題は、三一論の成立の機微を吟味するために看過すべきでない。さらに、Brown 2000, 144-150; Lancel 1999, 254-258 を参照。
- 15) Markus 1964, 133-134 を参照。
- 16) 『83 諸問題集』74: Bardy et al. 1952, 328.
- 17) 「創世記」1:27 について『告白録』13.23.33 にその註解を見出すことができる。とはいえ、それもまた『対マニ教徒註解』とおなじ靈的な解釈法にそくしている。『逐語註解』に先行する著作における「創世記」1:27 註解(たとえば、*Contra Adimantum* 3.2 (394年); *Contra Faustum* 19.29 (397/99年); *De consensu evangelistarum* 62.122 (399/400?年) など)についても同様である。
- 18) 『逐語註解』3.22.34: Agaësse and Solognac 1972a, 266-268 を参照。
- 19) こうした評価は『対マニ教徒註解』2.2.3のみならず、*De moribus* 1.10.17; *De utilitate credendi* 3.9; *Confessiones* 5.14.24, 6.4.6; *De sermone domini in monte* 1.10.26; *Enarrationes in Psalmos* 33.1.7, 33.2.14 に一貫している。
- 20) 『対マニ教徒註解』2.2.3: Monat et al. 2004, 272.
- 21) 『信ずることの効用について』3.9: Pegon and Madec 1982, 228.

- 22) 中期の『告白録』においても (5.14.24; 6.4.6), 「文字は殺し、霊は生かす」という「コリント後書」3:6を聖書解釈の戒めとしてすすめるアンブロシウスの説教を受容したうえでこの方法を批判している。
- 23) 『逐語註解』2.9.22; 8.1.2; 8.1.4; 8.2.5; 8.4.8; 11.1.2; 11.2.4を参照。
- 24) 『告白録』における「コリント後書」の引用はこの方法からいわば理解にかかわる「死」がもたらされることを示唆すると解することもできる。この章句に関する先行教父の解釈伝統、さらにアウグスティヌスにおける展開に関して、Bochet 2004, 54-89を参照。
- 25) 『再考録』1.18: Mutzenbecher 1984, 54.
- 26) 『逐語註解』8.1.4: Agaësse and Solignac 1972b, 14.
- 27) 『未完註解』2.5: Monat et al. 2004, 400-402.
- 28) 『信ずることの効用について』3.5: Pegon and Madec 1982, 216-218を参照。さらに、この四分類というシェーマの源泉としてヒッポの先任司教ウァレリウスが挙げられることは、Dulaey 2005, 22-26を参照。
- 29) 『対マニ教徒註解』2.2.3: Monat et al. 2004, 272.
- 30) 『逐語註解』8.1.2: Agaësse and Solignac 1972b, 10.
- 31) アウグスティヌスの聖書テキストに関するこのような様相理解は、Markus 1989, 187-191が指摘するように、後期の著作『神の国』に見出される聖書テキストの規定‘divina historia’, ‘nostrae religionis historia’ (18.40); ‘sacra historia’ (16.8.1); ‘prophetica historia’ (16.2.3)のうちに明白である。
- 32) こうした解釈法への反省は、一連の「創世記」註解を通してではなくむしろ他の聖書註解や『キリスト教の教え』における探求を通して遂行されたと思われる。たとえば、‘ad litteram’ と ‘proprie’, あるいは ‘proprie’ と ‘translata’ という方法上の相関性については稿をあらためて考察してみたい。

参考文献

一次文献

- P. Agaësse and A. Solignac, eds. *La Genèse au sens littéral I-VII*, BA 48. Paris, 1972a.
- P. Agaësse and A. Solignac, eds. *La Genèse au sens littéral VIII-XII*, BA 49. Paris, 1972b.
- G. Bardy, J.-A. Beckaert, and J. Boutet, eds. *Mélanges doctrinaux*, BA 10. Paris, 1952.
- P. Monat, M. Dulaey, M. Scopello, and A.-I. Bouton-Touboulic, eds. *Sur la Genèse contre les manichéens; Sur la Genèse au sens littéral livre inachevé*, BA 50. Paris, 2004.

- A. Mutzenbecher, ed. *Sancti Aurelii Augustini retractationum libri II*, CCL 57. Turnhout, 1984.
- J. Pegon and G. Madec, eds. *La foi chrétienne*, BA 8. Paris, 1982.
- J. Rivièrre, G. Madec, and J.-P. Bouhot, eds. *Exposés généraux de la foi*, BA 9. Paris, 2nd edition, 1988.
- 二次文献
- I. Bochet. *‘Le firmament de l’Écriture’: l’herméneutique augustiniennne*. Paris, 2004.
- P. Brown. *Augustine of Hippo: A Biography*. Berkeley, 2nd edition, 2000.
- O. Du Roy. *L’intelligence de la foi en la Trinité selon saint Augustin*. Paris, 1966.
- M. Dulaey. “L’apprentissage de l’exégèse biblique par Augustin (3). années 393–394”. *Revue des études augustiniennes et patristiques*, 51: 21–65, 2005.
- E. Hill, ed. *On Genesis*, WSA I/13. New York, 2002.
- 片柳栄一訳『創世記注解』「アウグスティヌス著作集」第16巻。東京, 1994.
- Y. K. Kim. *Augustine’s Changing Interpretations of Genesis 1–3: From De Genesi contra Manichaeos to De Genesi ad litteram*. Lewiston, NY, 2006.
- S. Lancel. *Saint Augustin*. Paris, 1999.
- M. Marin. “Il «De genesi ad litteram imperfectus liber»”. In «*De Genesi contra manichaeos*» «*De Genesi ad litteram liber imperfectus*» di Agostino d’Ippona, *Lectio Augustini* 8: 117–151. Palermo, 1992.
- R. A. Markus. “‘Imago’ and ‘similitudo’ in Augustine”. *Revue des études augustiniennes*, 10: 125–143, 1964.
- R. A. Markus. *Saeculum: History and Society in the Theology of St Augustine*. Cambridge, revised edition, 1989.
- B. Neil. “Exploring the Limits of Literal Exegesis: Augustine’s Reading of Gen 1: 26”. *Pacific*, 19: 144–155, 2006.
- R. J. Teske. “The Image and Likeness of God in St. Augustine’s *De Genesi ad litteram imperfectus Liber*”. *Augustinianum*, 20: 441–451, 1990.
- R. J. Teske, ed. *On Genesis*, FaCh 84. Washington, D. C., 1991.
- F. Van Fleteren. “The Cassiciacum Dialogues and Augustine’s Ascents at Milan”. *Mediaevalia*, 4: 59–82, 1978.
- M.-A. Vannier. *‘Creatio’, ‘Conversio’, ‘Formatio’ chez s. Augustin*. Fribourg, Suisse, 1991.